

大正末の海外渡航での岸田日出刀の行程について

Itinerary of Hideto Kishida's foreign travel in the end of Taisho period

○ 勝原 基貴², 大川 三雄¹Motoki Katsuhara², Mitsuo Okawa¹

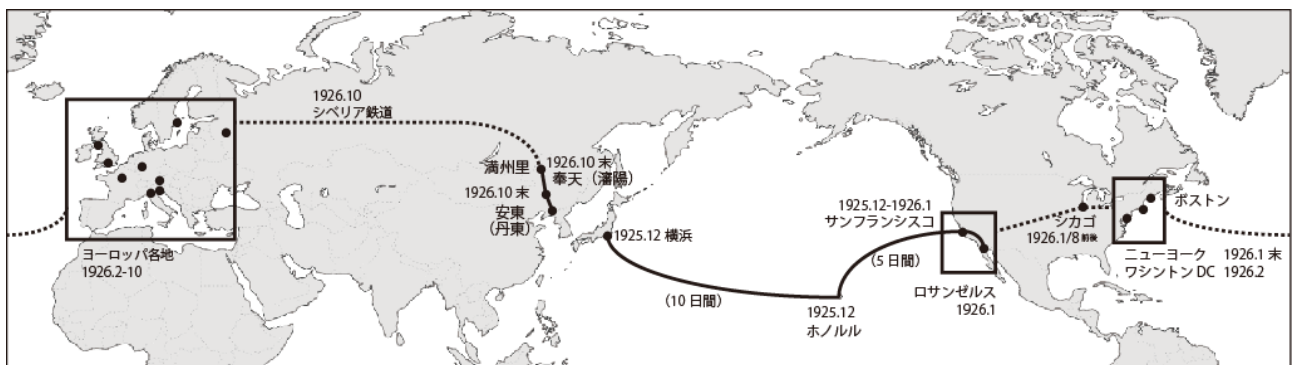
Abstract: In this article, we revealed Hideto Kishida's trail while he had been abroad in the end of Taisho Period, which had ever been unclear. Based on his memories showed on newspapers, magazines and other documents such as official documents, he had been abroad for nearly a year from mid-December in Taisho 14 (1925) to November in Taisho 15 (1926). His round-the-world trip departed the Port of Yokohama and then landed on Honolulu and the Americas at San Francisco and then he moved to the East Coast by way of Chicago. After leaving the Americas, he went around Europe and then passed by later Manchuria area by taking the Siberian railway and returned to Japan.

1 はじめに

海外からの情報を建築系雑誌等の文献や写真を通してでしか得ていなかった岸田日出刀にとって、大正末に欧州各地をめぐる洋行は異国文化に触れ、国外の建築物を実見した初めての経験となった。最先端の風を存分に浴びたこの海外渡航は、岸田のその後の建築活動に大きな影響を与えたようである。

岸田の建築観の形成にとって重要といえるこの最初の洋行だが、これまでの年譜にはその日付が記録されておらず、その詳細は明らかでなかった¹。没後に前川國男らが発起人となり編纂された『岸田日出刀』(相模書房, 1972年)に収録されている門下生による追悼座談会のなかでも、この大正末の洋行を重要視している意見がみられるが、アメリカ経由でドイツに向かったこと以外は誰もよく知らなかったようで詳しく言及されていない。また佐々木宏は岸田の洋行について「もし明確なことが分かったら訂正したい。」としながらも、前川の証言などから「1926年で一年足らずの期間だったのではないか」とし、また牧野正巳の遺族が所有している岸田が帰国後にいった講義ノートの存在から1927年の3月には帰国していたのではないかと推定している²。

図1 岸田日出刀の大正末の海外渡航での主な寄港地と滞在時期



1: 日大・理工・教員, Prof., College of Science and Technology, Nihon University

2: 日大理工・院・建築, Graduate School of Science and Technology, Nihon University

は「サンフランシスコの港に着いて、汽船の上からその町のスカイスクレーパーの集団を眺めたが、その時の夢みるやうな気持ちは、世界一周中の数ある想ひ出のうちでも、最も印象深い忘れることのできないもの一つとなつてゐる。」⁸と記している。このときの印象を後の著作で繰り返し述べていることから相当なカルチャーショックを覚えたようだ。

アメリカ大陸に上陸した岸田は宿で帰国途中の土浦亀城夫妻⁹に偶然会い、その紹介でロサンゼルス郊外にあるリチャード・ノイトラの自邸を訪問している。土浦の紹介を受けた翌日、サンフランシスコからロサンゼルスへと移動した岸田は早速ノイトラと会い、近作や諸計画案を見たほか、シンドラーとも面会、さらに一緒にフランク・ロイド・ライトの住宅作品を見学している。(1926(大正15)年正月)ノイトラがロサンゼルスに住み、建築事務所を構えたのは1925年であるだけに渡米するまで岸田はノイトラとシンドラーについてあまりよく知らなかった¹⁰。

シカゴでの日記¹¹に1月8日とあることから、その後シカゴに移動し、師・塚本靖の建築計画の講義中に取り上げられていたという精肉会社スウィフト社の屠殺場および缶詰工場「ユニオン・ストック・ヤード」を見学している。一月末にニューヨークに滞在し、1月26日にコロンビア大学ならびにティーチャーズカレッジの図書館を見学した他、聖パトリック大聖堂、グラント將軍の墓などを訪れている¹²。このころエンパイアステートビルは建設前で、当時世界一高いビルであったウールワース・ビルディングに昇っている。またスタンダード・オイル・ビルディングにあるロックフェラーの事務所を表敬訪問しているが、図書館の出資者であるロックフェラー氏の息子には南方への避寒中不在で面会は果たせなかった¹³。メトロポリタン美術館のほか、ボストンではボストン美術館、ワシントン DC (2月ごろ)ではスミソニアン・インスティテュートを訪れ、約三カ月間のアメリカ滞在を終えた岸田は、大西洋を横断し、ヨーロッパへ移動したようである。

夏ごろにオーストリアのウィーンでオットー・ワグナーの建築作品に触れているが、ヨーロッパでの足取りはその順序や時期が明らかでない。訪問したと考えられる都市・建築物¹⁴は以下のとおりである。

イギリス(グラスゴー(ケルビングローブ博物館)、ロンドン)、フランス(パリ)、ドイツ(ベルリン(カイザー・フリードリッヒ博物館)、ハイデルベルグ)、スイス、オーストリア、イタリア(ローマ、ナポリ(ナポリ博物館)、ヴェネチア(サンマルコ寺院)、トスカナ地方:フィレンツェ他)、オランダ、スウェーデン(ストックホルム(市庁舎))、ロシア

またヨーロッパ滞在中に建築史家で同期の長谷川輝雄が急逝(5月15日)し、岸田はその翌々月の7月23日付で高等官七等から六等に昇格している。

帰路はロシアの建築を見聞した後、シベリア経由を選び、満州里から奉天を経て安東¹⁵まで鉄道で移動したようだ。大正15年11月27日から30日までの3日間の手当の計算に関する一筆があり、この日(11月27日)をもって「東京帝国大学助教授兼東京帝国大学技師、高等官六等」に任命されている。10月末に満州を通過していること、11月末の任命、12月の手当及び給料の支払い帳簿に岸田の名が戻ること、11月に建築学会のパンフレット刊行委員会委員(15名)に委嘱されていることから、1926(大正15)年11月には帰国していたと考えられる。

3 まとめ

岸田の初めての洋行の期間が大正14年12月中旬から大正15年11月までの約1年間であり、横浜港を発ち、ホノルル、サンフランシスコからアメリカ大陸に上陸、シカゴ等を経由し東海岸に移動し、ヨーロッパ各地を回り、シベリア鉄道で後の満洲地域を通過し帰国する世界一周の行程が明らかになった。

帰朝後には博士論文や「海外に於ける建築界の趨勢」、『オットー・ワグナー』、『高層建築』、『過去の構成』、『現代の構成』といった諸著書を短期間に多数執筆する。今後はこうした著書と洋行での出来事との関連を含めて、岸田の問題関心の所在について考察を行っていきたい。

¹『岸田日出刀』(相模書房、1972年)に載る岸田日出刀の年譜には経歴欄に「昭和1・第一次大戦」¹とだけ記載されている。

²佐々木宏『巨匠への憧憬』(相模書房、2000年) p.p.117-134

³国立公文書館、東京都公文書館所蔵の資料、建築雑誌掲載の会員動静欄を参考にした。
⁴佐藤武夫が座談会で「安田講堂の設計を終わってから今度は図書館、その視察という名目で外遊されたように思いますが…」、『岸田日出刀』(相模書房、1972年) p.204と述べている。国立公文書館に保管されている行政文書からは、この大正末の洋行に関する文書は見当たらず、公費か私費かは明らかでない。佐藤の証言とニューヨークでロックフェラー氏を表敬訪問していること、広く世界の建築を見てくるようにすすめたのは図書館建設を指揮していた内田祥三であったことなどから、外遊の名目は図書館建設の際の調査を兼ねたものであったと考えられる。

⁵東京帝国大学の図書館は1923(大正12)年9月の関東大震災で全焼するが、ロックフェラー財団からの寄付金(四百万円)をもとに再建する。内田祥三を中心に図書館建築委員会が組織され、岸田はこの図書館建築部に事務嘱託として名を連ねている。

⁶東京都公文書館に保管されている手当ての日付は12月18日となっているが、支給額以外は定型文が複製された用紙であり、サンフランシスコまでの航海日数を考慮すると受領者欄の署名は18日より前に書かれている可能性がある。
⁷岸田日出刀『高層建築』(三省堂、1930年)、岸田日出刀「高層建築」(島中雄作編『婦人公論大学』(中央公論社、1931年)) 岸田日出刀「アメリカの高層建築」、『工業雑誌』68(855)、1932年、岸田日出刀「日本の都市」、『市政』5(9)、1956年、p.p.1-12

⁸文末注7に同じ。

⁹岸田と土浦は一高時代からの同期生であり、晩年まで親交が厚い。

¹⁰岸田日出刀「アメリカの新建築とノイトラ氏」、『国際建築(リヒャート・ノイトラ号)』6(7)、1930年、p.p.4-9

¹¹岸田日出刀「古日記から」、『覚』(相模書房、1937年) p.p.102-120

¹²文末注11に同じ。

¹³文末注7に同じ。

¹⁴岸田日出刀「欧州近代建築史論(一)~(四)」、『建築雑誌』42(510-513)、1928年)、岸田日出刀「陳列室と光線」、『新興芸術』(4)、1929年、p.p.119-132)、岸田日出刀「博物館建築の計画」、『国際建築』7(1)、1931年、p.p.1-15)等を参照した。

¹⁵満州里から奉天(現、瀋陽)を経て安東(現、丹東)まで鉄道で移動したようであるが、この際の後の満州国の諸都市は車中素通りした程度であったようで、寒々としてあまりよい印象ではなかったと述べている。(岸田日出刀「豊穡な印象」(風土研究会編『満洲の印象』(吐風書房、1944年) p.p.215-222))